

英文の読み方を考えるVI

—修飾関係に焦点をあてて—

② 副詞的修飾語句

平井 正朗

本稿は、No.62に掲載された「英文の読み方を考えるVI—修飾関係に焦点をあてて—①形容詞的修飾語句」の続編である。後半となる今回は、副詞的修飾語句の誤読事例を挙げ、検証したいと思う。No.62と併せて読んでいただければ幸いである。

III 副詞的修飾語句

副詞的修飾語句の位置は、文法的制約のある〈頻度〉を表す副詞(always, sometimesなど)を除いて、形態上、(M)S(M)V(M)X(M)の可能性があり、意味上、V、形容詞、(他の)副詞などを修飾する場合と文修飾副詞の場合に大別できる。従って、読解では修飾先を確定した上でcontextに応じた適訳を考えなければならない。(以下、太字イタリックは筆者。)

- (12) The white-crowned sparrow, a California resident, has dialects *so* different, *even within the San Francisco area*, that someone with a cultivated ear would be able to tell where he or she was in California, *blindfolded, simply* by listening to their songs. (東京外大, 04)
(カリフォルニア生息のミヤマシトドは、サンフランシスコ地域内でさえあまりにも異なる方言をもつので、訓練された耳の持ち主ならたとえ目隠しされていても、彼らの鳴き声を聞くだけで、自分がカリフォルニアのどこにいるのかわかるだろう)

副詞 *so* は後続する形容詞 *different* を修飾する副詞であり、その *sense group* が形容詞的後置修飾語句として *dialects* を修飾している。同時に *so* は〈情報予告〉、副詞的修飾語句となる *that* 節は〈情報展開部〉として機能し *so ~ that...* の相関構文を

形成、意味上、〈因果関係〉を派生している。*even* は後続する前置語句を修飾する副詞として機能し、*even within...* がその *sense group* で *has* の副詞的修飾語句となっている。追加的焦点化副詞であるから、「サンフランシスコ以外にも方言があり、サンフランシスコには方言がある蓋然性が低い」という〈前提〉を踏まえた上で読解を進めたい。なお、*blindfolded* は仮定法過去が内在した文修飾副詞となっている。

- (13) *After all, in mindless moments* our brains still function: all senses are present *if not entirely correct, as the final perspective on what is happening around you is a little distorted compared with 'normal'*. *Not only that, but* you can move your muscles, *even if with a little less control or with greater hesitancy*.

(京都大, 09)

(結局、意識が正常でないときでも、脳は依然として機能している。周囲で起こっていることに対する最終的な見方が「正常」な時と比較すれば、少し歪んでいるので、完全に正しいというわけではないにしても、感覚はすべて存在しているのである。それだけでなく、正常時に比べてたとえ多少コントロールが効かなくなり、ひどくためらいがちになるにせよ、筋肉を動かすこともできるのである)

After all は筆者の主張や結論に結束する *discourse marker* として機能するだけでなく、並列する *in...moments* と共に副詞句として *function* を修飾している。また、*if...* は副詞節として解釈するのが通例であるが、*present if not entirely correct* の *sense group* を形容詞的修飾語句とし

てとらえ、are の C とみなしたほうが合理的ではな
 かるうか。なお、as... は〈原因・理由〉を表す副詞
 節であり、その内部で compared with... が分詞
 構文 being 任意削除の副詞句として機能している。
 さらに、前方照応語句となる that とリンクする
 Not only との sense group の〈追加情報〉が but
 以下に描写され、その内部で even if... が move
 を修飾する副詞的修飾語句になっている。

- (14) When there is a lot of insecticide
 around, this strategy works like
 shoveling the snow in front of your
 house during a heavy snowstorm — it's
 successful **only** if you have a lot of
 shovels. (東京大, 08)

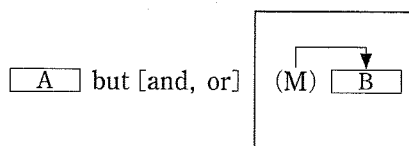
(周りに殺虫剤がたくさんある場合、この戦略
 の機能は、ひどい吹雪の最中に家の前を雪かき
 するようなものである。それがうまくいくのは
 スコップがたくさんある場合だけなのだ)

副詞が副詞節を修飾する事例である。(14)では
 only が if 節を修飾している。副詞節を修飾する
 副詞の生起頻度の高いものとして even, only,
 simply, just などがある only は、深層に〈排他〉
 を含意し、焦点となる語句 X と結合すると X 以外
 に該当しないという意味領域を生起、context から
 only を除外した部分が〈前提〉、only を含む部分が
 〈断定〉と示唆している。ここでは「スコップがあれば
 この戦略が機能する」を背景として成り立っており、
 その上に「達成可能」を重層化し、「不可能な
 場合」に対比的イメージを付与することによって焦
 点化させるという文体的効果をもっている。

- (15) "Ignorance is bliss" was once an acceptable
 excuse, but **in today's information age**
 we are all responsible for knowing and
 following the rules. (信州大, 08)
 (「知らぬが仏」は、かつては許される言い訳で
 あったが、今日の情報化時代において、我々は
 みな規則を知り、従う責任がある)

等位接続詞 and, but, or の後に副詞的修飾語句
 がある場合、その修飾先の検索と sense group の

確定において解析エラーが見られる。(15)では but
 に副詞句 in...age が後続しているが、"Ignorance
 is bliss" was... と we are all... という 2 文が対
 等な関係になっている。but の前に in...age と文
 法上対等な語句がないことから次のような読み方
 をしなければならない。なお、A but (M)B のように
 等位接続詞に後続する副詞的修飾語句は、B のみを
 修飾し、A を修飾することはない。



- (16) In our narrow-minded view that only
 solar-powered life is possible, we have
 presumed that **if any planet could**
support life it would be in a zone where
 the surface conditions are similar to
 ours. (東京大, 08)

(太陽エネルギーによる生命だけが可能だとす
 る我々の凝り固まった見方では、もしいずれか
 の惑星が生命を維持できるなら、それは地表の
 条件が私たちの惑星(地球)に似た一帯において
 であろうと仮定してきた)

副詞節として機能する if...life の sense group
 が have presumed の O となる that 節内部に派生
 した例である。that 節内部で it は前方照応語句と
 なり、if 節を指示しているが、ここでは「生命を維
 持できる惑星があるとすれば、それは地表が地球に
 類似したものならどれにでもあてはまる」という深
 層情報を含意する。なお、名詞節を導く that 節の
 直後が副詞句、副詞節で始まるケースの頻度は高い
 ので、読解では S + V + O [that(M)SVX] の構造
 に習熟しておかなければならない。

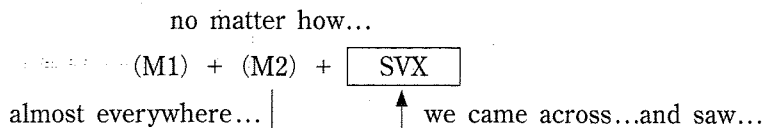
- (17) It is true that **almost everywhere we**
went, no matter how seemingly remote,
 we came across shepherds and saw
 smoke rising from villages in the
 distance. (佐賀大, 08)

(ほとんどどこへ行っても、また、どれほど離
 れているように見えても、私たちが羊飼いと偶
 然出会い、遠くの村から煙が立ちのぼっている

のを見たのは本当である)

that 節内部に副詞的修飾語句が並列しているケ

ースである。文頭に副詞節が複数並列する場合、ともに後続する主文の V を修飾するのが通例である。



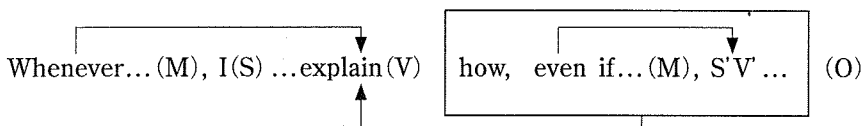
- (18) *Whenever I have been asked whether I would experiment on myself, I have had to explain how, even if the many technical obstacles could be overcome, and a mini-me could be born without risk, the answer would be the same.*

的な障害が克服できても、また小型の私が危険を冒さず生まれることができても、答えは同じであるということを説明しなければならなかった)

(東北大, 07)

文頭の Whenever... は副詞節として文全体の中で、even if... は主節の explain の O となる how... 内部で副詞節として機能している。統語構造は以下の通りである。

(自身に対して実験をするつもりかどうかを尋ねられたときはいつも、たとえもし多くの技術



even if は even though と同義のように扱われているが、前者は仮定法的ニュアンスの強意、後者は事実をベースとした直説法的ニュアンスの強意というイメージでとらえておけばよい。

and, but, or に代表される等位接続詞は、文法的に対等な語句を連結するのが基本であるが、等位接続詞の後に副詞(句、節)が生起し、A and (M) B という統語環境が派生することもある。(19)では and の直後に副詞節 even when... があるが、前方に副詞節がないので SV...and (even when...) (M) SV を想定する。なお、副詞 even は副詞節 when... を修飾している。

- (19) The filmmaker's mission is to get the viewer to see things in a particular way. Shots are arranged to emphasize what's important, and *even when the viewer's eye is allowed to wander around the frame*, the composition of the image compels particular interpretations.

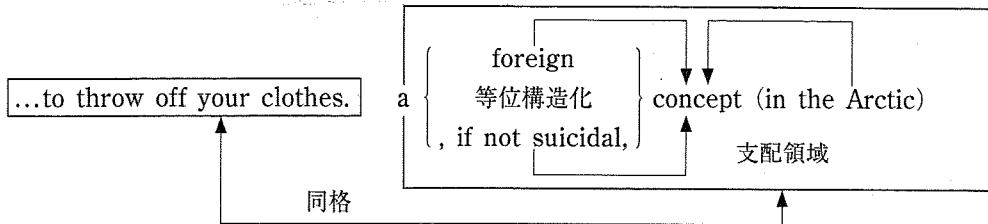
(神戸市外大, 07)

(映画製作者の使命は、視聴者に特定のやり方でものを見させることである。映画の場面は、重要なものを強調するよう配置され、観客の目が画面の枠中をさまよふのを許されるようなときでさえ、映像の構図が特定の解釈を強要するのである)

- (20) While Inuit have numerous expressions for ice, they have no equivalent of the Swahili mvuki, which loosely means to throw off your clothes — a foreign, *if not suicidal*, concept in the Arctic. (金沢大, 05) (イヌイット語には ice にあたる数多くの表現があるが、服を脱ぎ捨てることは、北極では、自殺同然とは言わないまでも、なじみのない概念であり、このことを漠然と意味するスワヒリ語の "mvuki" に対応する単語をイヌイットの人々はもっていないのである)

if は従位接続詞であるから A, if not B とあれば副詞節を復元するのが一般的であるが, その sense group を等位構造化した構成素とみなし, 「B でなければ A」と解する方向性を提示する。ここでは

限定詞 a に支配される名詞句内部構造で foreign, suicidal という形容詞がともに concept を修飾する形容詞的修飾語句となっており, さらに to throw off your clothes と同格関係になっている。



- (21) One should not be afraid to try new things, such as moving from one field to another or working at the boundaries of different disciplines, for it is *at the borders* that some of the most interesting problems reside. (京都大, 08)

(ある分野から別の分野へ移動したり, 異なる学問分野の境界で研究したりするといったような, 新しいことを試みることを恐れてはいけない。というのは, 境界上にこそ最も興味深い問題の一部が存在しているからである)

強調構文という名称で定着している分裂文において, It is — that 間に生じられる品詞は N(句, 節), もしくは副詞(句, 節)であり, それが焦点化され, 新情報として機能する一方, 分裂節部分は前提となる旧情報として機能する談話構造であるが, 焦点部が前方照応語句として先行文脈と結束する点を読み落とさないようにしたい。(21)では *at the borders* という副詞句が焦点化されているが, 「学際的研究の価値」をキーワードに「専門主義」と選択対比的に描写されている。なお, It is + 副詞句 + that... の場合, ... に「完全な文」が生じられるのが特徴である。

- (22) The most important of the “chains” in my life has been the one that binds me to Japan. For some years, especially when anti-Americanism was at its height, I worried that something might break

the chain, that I would not be able to return. *Fortunately*, this did not happen. (広島大, 08)

(私の人生の中で最も重要な「きずな」は, 日本と自分をつないでいるものである。数年間, 特に反米思想が最盛期だったとき, 私は場合によっては何かきずなを断ち切り, 戻ることができなくなるのではなからうかと心配した。幸い, これは起こらなかった)

大学入試問題においては, 評価副詞として分類される文修飾副詞 *Fortunately* に対する筆者の気持ちを 80 字以内の日本語で要約するといった設定であったが, 話者の評価を表すという文体的効果を鑑みて「日本で反米思想が最盛期だったとき, 日本とのきずなが切れ, 日本に戻れなくなるのではないかという不安が, 現実化しなかったという安堵の気持ち」と前述内容から結束性を読み取る読解力が要求される。(< It was fortunate that this did not happen.)

(雲雀ヶ丘学園中高等学校教諭)